
雨上がり、傘を返しに。

いちお

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨上がり、傘を返しに。

【Nコード】

N2854S

【作者名】

いちお

【あらすじ】

「Smile Japan」参加作品。中学1年生の二宮郁は、にわか雨の降る中、猫を拾いに行った。ずぶぬれになった郁に傘をさしかけたのは、あこがれの国立先輩。後日郁は傘を返しにいくけれど、何故か先輩は受け取ってくれなくて――。

原稿用紙30枚程度の話です。

まだ保つだろうと思っていた空は、にわかに震えて一気に落ちてきた。上をうかがい見る余裕もなく、雨は轟音を立てて降り注ぐ。

にのみやかある

二宮郁は大きな公園に駆け込んだ。つかかけがぬかるみから泥をはねあげるのを気にせず力一杯走る。正面の大きな常緑樹の根元にダンボール箱が置いてあった。わき目もふらずたどり着き、すぐさましゃがみこんで手をすくい入れた。持ち上げたのはハンカチに包まれたやわらかいもの。少し禿げた木はひさしがわりにならず、ハンカチはぐしよぐしよに濡れ、包まれた子猫は小刻みに震えていた。学校帰りにみつけた。かわいそうでもどうにも放っておけず、でも許しをもらわずに連れて帰るわけにもいかなくて、一旦帰って祖母に頼み込んだ。ひどくしぶっていたがさっきようやく許してくれた。祖母が味方になってくれるなら両親への説得はなんとかなる。

子猫はぬくもりを求めて郁の手のひらに額をすりよせた。

「寒い！？ ああどうしよう」

小学生のような幼いひざの上に載せて、両手ではたばたと衣服をさぐった。ハンカチはない。私服に着替えた時にポケットにハンカチを入れる習慣はないし、セーラー服のままだったとしても今日のハンカチはここで濡れそぼっているやつだ。

「何で梅雨の季節に捨てたりするのよう」

愚痴がこぼれた。たかだか往復二十分と考えた自分の粗忽そいっを恨むのに。

震えは大きくなっているようだった。Ｔシャツの上に羽織った上着代わりの長袖シャツを脱ごうとした。左肩を外したところで視界が急に曇った。からだに打ち付けてきていた雨がやむ。

「猫？」

驚いて見あげると、見知った人が見下ろしてきていた。郁は思わず叫んだ。

「国立先輩いゝ!？」

くにたちともひろ

国立智弘先輩は、郁が通う中学校の三年生で、サッカー部のレギュラーでキャプテンもつとめている。運動部をまとめる主将もつとめていて、全校集会では運動部関連の報告をするために壇上にのぼる。あごが細く、目鼻立ちもほっそり整った中性的な容姿から女子の注目を集め、校内一の有名人になった。かくいう郁も、生徒会役員より先に先輩の顔を覚えた一人である。

子猫を拾った翌々日、郁は黒い折畳み傘と白いタオルを腕に抱いて、もう片方の手で頬に手をあててぼやんとしながら言った。

「もうどうしたらいいんだろー」

先輩は猫にタオルを、郁に傘を貸してくれた。話しただけでも夢のようなのに、まさか傘を貸してもらうことになるなんて。

プレハブでできたクラブハウスの陰に一緒に隠れてくれている朝美^{さみ}が、いつもは張りのある声にため息を混ぜて言った。

「どうしようも何も、返すだけじゃない。せつかくだから一人で رفتてお近付きになっちゃえばいいのに」

郁の気持ちを知つての発言だったが、当人は血相を変えて叫んだ。「そんなことしたら殺されちゃうよ！」

思わず大声を出してしまった郁は、慌てて口を押えて辺りを見回した。人影は見あたらずほっとする。朝美は腰に手をあててため息をついた。

「親衛隊のこと？ そんなのいるわけないじゃん」

「すっごい噂になってるのに？」

郁は口をとがらせて抗議した。

先輩には恐い親衛隊がついているという噂がある。近づく女子は吊るし上げをくらい、告白した子に至つては口では言えないほどの目に遭わされて学校に来れなくなったという。校内の誰もが知って

る噂だ。

親衛隊なんてアイドルじゃあるまいし、ありえないと郁も思う。けど、火のないところに煙はたたない。当然何かがあったはずだ。それが何なのかわからない分怯えをつのらせて、郁は身震いした。「一人じゃ恐いからついてきてって言ったんじゃない。傘は助かったけど、これ以上お近付きになんかたりたくないよ」

先輩は今、一人で部室に入っていたところだった。校舎の影にあるため目立たず、あたりに人はいない。返すには絶好のチャンス。「先輩が出てきたらすぐ返して終わりだから。それまで、ね？ ね？」

「あーはいはい」

ドアの開く音がした。郁は安全確認よろしく左右後ろ人目がないのを確かめて飛び出す。

「あ、あのっ」

声をかけると先輩は立ち止まって振り返った。朝美が後ろにいてくれることを頼りにしつつ力いっぱい傘とタオルを差し出した。

「こっこれ、ありがとうございました！」

地面と水平になるくらい頭を下げる。これで終わりだ。ほっとするのと同時に残念なような。が。

「今部活中だから」

地面を擦る音がして郁が状況が飲み込めず顔を上げると、先輩はきびすを返して歩き出したところだった。校舎の角に姿を消してしまふ。つぶやきが口について出た。

「え？」

手元に残された傘とタオルに目をやり。

「え？」

もう一度先輩の消えた方を見て。

「えええ〜？」

朝美が横に立って、同じ方向を一緒に見ながら後ろ頭をかいた。

「ウチのサッカー部って、部活中に貸した物を受け取っちゃいけないほど厳しかったっけ？」

「そ、そんなに厳しかった？」

「いや、知らないから聞いてるんだけど」

傘とタオルを握りしめ、郁は途方に暮れるのだった。

翌日、早朝を狙って先輩の下駄箱に傘を返した。上履きの隣に折畳み傘を置き、茶色い紙袋を奥に押し込む。紙袋の中に借りたタオルと、プレゼント包装したタオルを入れた。

昨日、混乱から立ち直ったあと考えた。何故先輩は受け取ってくれなかったんだろう。いくら学校の期待がかかっているからといって、サッカー部が厳しいという話は聞いたことがない。

だとしたら不機嫌だったとか、何か気に入らないことがあったのだろうかと思いつた。お礼の品の一つも持たなかったのがいけないかったかと、駅前まで行って似たようなふかふかのタオルを買ってきた。借りていたタオルも洗いはしたけれど、それを素手で、しかも傘とかさねて持っていたから不潔に思われたのかもしれない。もう一度洗い、仕上げの柔軟材を倍量使った。下手にかわいらしい袋に入れると悪目立ちしてしまうかもしれないからと、わざとそっけない袋に詰めた。

考えられるだけの手を尽くした、と郁は下駄箱にむかつて満足顔でうなづいた。

最初からこうすればよかったのだ。朝美に言われて下駄箱という手があることに気付いた。うんざりしながらも一緒になって考えてくれた朝美に感謝した。

始業まであと十五分というところになると昇降口は途切れない程度に人が行き交うようになる。十分後には人にぶつからずにはいられないほどごったがえすとは思えないくらいゆったりしている。

そんな中で国立智弘は一人険しい顔をして佇んでいた。手にしているのは桜色のカード、腕には口を開けた紙袋をかかえていた。

「何それ？ ラブレター？」

クラスメートで友人の克史^{かつし}が声をかけた。智弘は克史の目線から

カードを取り上げ、学ランの胸ポケットに落とし込んだ。

「ちよつと用事」

智弘は紙袋の口を巻いて、しかめ面のまま早足で立ち去った。

郁は早すぎる登校で暇をもてあまし、教室後ろの掲示板に貼りだされている校内新聞を読み直していた。

端っこのほうに国立先輩のことが書かれている。

先輩率いるサッカー部は、今年は県大会を突破できるのではと期待されている。生徒会に推薦されていたけど部活に専念したいという理由から辞退し、かわりに運動部主将に選ばれたということだった。プライベートの記事には猫が好きだと書かれていた。『小学校の頃飼ってたんだけど、引っ越してマンションになってからは飼えなくて。だから猫にさわりたくてしょうがない（笑）』

何度読んでも笑ってしまふ。大人びた外見と反対にこんな子供っぽいところがあるなんて。この記事を読んでから郁は先輩に親しみを持つようになった。

でも今日は読み終えたその場でため息がこぼれた。先輩が傘を貸してくれた理由はこれだったんだ。暗記するくらいまで読んだつもりだったのに、気付いたのは昨晚だった。よっぽど浮かれていたんだと思う。自分にやさしくしてくれたのだと勘違いするほどに。昨日の冷たい態度を思い出して郁は悲しくなった。

「二宮郁って子、いる？」

郁は顔を上げて戸口の方を見回した。思いがけない姿をみつけてあんぐり口を開ける。入口付近にいて声をかけられた男子生徒は返事できないまま、教室の中を見回す。視線が郁の上を通り過ぎた。目立たない郁のことをまだおぼえていないのだろう。男子と一緒に見回していた先輩は見過ごしかけた視線を戻して郁に合わせた。

「あ、いたいた。ちよつと」

手招きされて放心したまま近寄った。先輩はにつこり笑った。

「あのさ。手紙にはありがとうございましたって書いてあったけど、下駄箱に入れておしまいになれちゃ誠意を感じられないんだよね。」

昼休みに教室まで返しにきてくれる？」

差し出されたものを郁は反射的に受け取った。先輩の手が離れていつてから郁は慌てふためく。

「え？ あっ？ えっ！？」

紙袋を返そうと差し出してみるものの、先輩はすでに背を向けていた。追いかけて廊下に出る。大股に歩く先輩から、昨日と同じ追いかけられない雰囲気を感じられた。

先輩の姿に絶句して見入っていたクラスメートたちは、先輩が教室の中から見えないところに行ってしまうと堰を切ったように騒ぎ出す。

「国立先輩じゃん！」

女子がわつと郁を取り囲んだ。

「先輩から何もらったの？」

「違うつて。返すとか何とか言つてたから先輩から借りたんじゃないの？」

「えー！ 二宮さんって国立先輩から何か借りるくらい親しいんだ！？」

口をはさむことを許さない勢いに郁は喉まで硬直した。浴びせかけられる声が責めてきているように感じられて、怯えが止めようとしても止められない。血の気が引いて足ががたがた震えた。

「ちよおつとごめん」

すぐみの効いた声に振り返った女子は、朝美だとわかるとすぐごと道を開けた。郁にとつてきびきびとした頼りがいのある友人は、たまに言葉遣いが冷たいのとつり目を誤解されて敬遠されている。中学に入ってからのことではないので朝美は頓着しない。郁の側まで来ると、女子たちは口を閉じてそそくさと教室に入ってしまった。

「どうしたの？ 返してこなかったんだ？」

「……下駄箱に入れたんだけど、昼休み、教室まで返しに来てつて返された」

わななく声をふりしぼったけれど、ようやく聞こえるかの声しか

出なかった。耳を傾けて聞いた朝美は、眉をひそめ郁に目を向ける。
「はあ？ 何それ」

半分は先輩に対する不快の反応で、もう半分は事情が飲み込めなくて聞き返している。小学校からの付き合いだから口調や表情でわかる。ちゃんと説明したかったけれど、言葉にできなかった。教室に戻ってもまだ向けてくる女子の視線が怖い。おどおどうつむく郁を見る目は、好奇心から不審の色に変わった。何で先輩と？ と聞いたそうにする辛辣さと、意味が聞き取れないほどの小声で交わされるひそひそ話が、授業中まで郁を苛^{さいな}んだ。

耐えられなくなった郁は、二時間目の放課朝美につきそわれて保健室に行った。

養護教諭は青ざめて泣き出しそうな顔をしている郁を寝かせてくれた。白いカバーのかかった布団に横向きで丸まると、下にした方の目の端から涙がにじんで流れていった。

噂は本当だ。皆が皆親衛隊で、ああやっていられないようにするんだ。

そんな馬鹿な話あるわけないと理性が言っているが、傷ついた心はそれを真相にしたがつていた。そして親衛隊をあおるのは国立先輩本人だ。気に入らない相手にわざと近付^{いっしょ}いて嫉妬心をあおるんだ。猫にはやさしい人だから、あの一時だけ機嫌が悪かっただけで本当はやさしい人だと信じていた。けれどももう信じられそうにない。

昼休みになると朝美は傘と紙袋を持ってやってきた。

「先延ばしにしてもよくないでしょ。一緒に行くよ」

郁はのろのろと起きて朝美の後ろをついていった。

昼休み、国立智弘は席について頼杖をつき、手をかざして持っているカードを眺めずかしていた。

「お。朝のラブレター？」

「違うよ」

「割ににやけてるじゃん。こう、にーってさ」

克史は自分の唇の端と端に人差し指をひっかけて引っ張り、少し持ち上げて笑顔にしてみせた。それを見た智弘は口をすぼめ、頼杖を解いてカードを伏せて置いた。

「そんなんじゃないくてさ。傘貸したんだよ」

「傘？」

智弘はかいつまんで説明した。

下校の最中、どしゃぶりをものともせず一目散に走っていた女の子を見かけた。公園の木の根元にしゃがみこんだ彼女の口ぶりから猫を拾いに來たのだと察した。寒そうにしているらしい猫のために上着を脱ごうとしているところを、傘をさしかけて止めた。

智弘はぷつとふきだして手をひらひら振った。

「それがリアクションの面白い子でさ。俺見て目をまん丸にして『国立先輩いー！？』だってさ」

克史は眉をひそめた。

「何だその漫画みたいなリアクションは」

「だろ？ 実際にやってる奴はじめて見た」

「それがラブレターとどうつながるんだ」

克史を見あげて笑っていた智弘は、急にむすつとして目線をおろした。

「だからラブレターじゃないって。メッセージカード。貸してください。さってありがとうございました、だってさ。本当に感謝してるなら下駄箱に返しておしまいにするなっ」

「え？ でも紙袋もカードの子だろ。お礼の品だったんじゃないか？」

「……傘と一緒に貸したタオルとプレゼント包装の包みが入ってた」「じゃあやつぱりいい子なんじゃん」

智弘は思いつきりのふくれ面になった。

「殺されちゃうからお近付きになりたくないって言う子の、どこがいい子なんだよ」

委員会で遅れて一人部室で着替えて外に出ようとしたときだった。殺されちゃうよ、というおだやかでない叫び声につい聞き耳を立てた。耳をすませたら、それまで誰かの声が聞こえるという程度だったのが、意味が聞き取れるくらいになった。親衛隊という言葉で自分のことだと思った。傘を返すという言葉であの子だとわかった。お近付きになりたくないと言われて傷ついた。自分は何もしてないのに嫌われる。噂のせいで女子が距離を置くことには気付いていたけど、ここまでこっぴどいのははじめてだった。

椅子に座ってあいづちをつきながら熱心に聞いていた克史は、考え込みながらうなるように訊ねた。

「じゃあさ、お近付きになりたくない、とかは直接言われたわけじゃないんだ？ 本人が目の前にいないからつい口がゆるんじやつたっただけじゃねーの？」

「部室にいたっていても、ベニヤ板一枚二枚の距離だぜ？ 筒抜けに決まってるじゃないか。猫のために上着を脱ごうってくらいの子だからやさしい子だと思ってたのに、がっかりだよ」

智弘は言いながら思い出して腹立ちを新たにした。

お礼の品が欲しくて受け取らなかったんじゃない。拾うくらいだから猫が好きなんだと思った。だから傘を返してくれるとき猫の話をして、できたらあの時の猫をさわらせてもらえたらいいなと考えた。雨の中猫に上着をあげようとしたくらいやさしい子だから快くOKしてくれるんじゃないかと期待した。面白い反応をする子だから話せたら楽しいと思ったのに。

ぶすくれる智弘に、克史はあきれてため息をついた。

「俺はその子の気持ちわかるな。謎の親衛隊の噂知ってたら誰でも近付きたくないって」

「俺、中学校に入ってから女子に親しくしてもらったことなんて一度もないんだから、吊るし上げくらって学校に来れなくなっただ子がいるわけがない。それに実際に被害者の名前が出てくるわけじゃないだろ？　そういう噂はたいてい嘘じゃなか」

「嘘でも噂が立つということ自体が恐いんだけどね」

克史はぼそりつぶやいた。

「国立ー！　一年が呼んでるぞ」

教室の入口から声かけられた。智弘はすぐに向かった。ためらう様子がないことから心当たりがあるらしいと克史は察した。あとを追う。

「誰だ？」

「例の子だよ。下駄箱じゃ誠意がないから教室まで返しにくるよう言っておいたんだ」

克史はあぜんとして立ち止まった。智弘は返してもらったばかりのものをわざわざ渡しに行つて、それを返しなおせと言ったのか。

智弘は楽しそうだった。自分のしていることの意味がわかってない顔だった。

智弘は入口の脇に立つ女の子を見て顔を引いた。違う子だった。一瞬違う呼び出しだったかと考える。が、その子の後ろからおぼえのある顔がのぞいて、昨日つきそってやってきた子だということを思い出した。

「ほら郁」

朝美は後ろを見て声をかけた。二宮郁はおどおどと出てきて傘と紙袋を両手に持って突き出した。

「貸して下さって、ありがとうございました」

元氣のない声。でも智弘には不機嫌に見えた。そこまで嫌うのか。かちんときた智弘は両手をこぶしにしてつんとそっぽを向いた。

「礼をするのにつきそい付きっていうのはないんじゃないか？ やりなおし」

「おっおい！」

克史が肩に手をかけて引つ張った。やりすぎ、と咎めようとしたが、その前にしゃくりあげる声が聞こえた。

郁は大粒の涙をこぼして泣いていた。傘と紙袋を朝美が預かると、郁は両手の甲で涙をぬぐった。ぬぐってもまたこぼれてくる。

朝美は智弘をにらみつけた。

「郁が気に入らないからって、ここまでするなんてひどいです」

傘と紙袋をたたきつける勢いで押し付けた。泣き出した郁に呆然としていた智弘は無意識に手をあげて受け取った。朝美は郁の肩を抱いてうながし、廊下を曲っていった。

「やりすぎだよ、おまえ」

硬直していた智弘はぎくしゃくと振り返り、弱りきった情けない顔を克史に向けた。

「何で泣くんだ？」

「アホか。あれだけやりゃあ誰でも泣きたくなるって」

「でも朝は全然泣く様子なかったのに。ぽかんと口開いて目え見開いて、傘渡そうとしたら手伸ばして受け取ってさ、うるたえるんだ、漫画みたいに。それに今だって漫画みたいにびくびくして」

克史はぽんぽんと肩をたたいて話を止めた。

「いいかげん漫画みたいから離れるや。おまえ、あの子の気持ち、考えてなかっただろ。意地悪されじゃ悲しくもなるさ。……まあ、おまえの気持ちもわかったけどさ」

「俺の気持ち？」

「あの子に構いたくなるのは好きだからだろ？ あの子からお近付きになりたくないなんて聞いたから、それでムキになってんだ」
智弘はかつと顔をあからめた。

「違う！ 俺は単に」

単に腹を立てていただけだ。嘘ばかり信じて自分を避けようとするあの子に。わざとだろとつつこみたくなるような変なりアクションを面白がっていただけだ。

決して好きとか、ましてや恋愛感情なんてありえない。

「……好き、とか、そういうことは、全然」

言い訳がましい言葉につれて、紅潮した顔はどんどん冷めていった。克史はこれみよがしなため息をついて、親指でちゃんと智弘の胸をつついた。

「あの子が泣いたとき、ここが痛かったんだろ？ 恋愛感情とかなかったとしても、痛かった分だけあの子のこと気にかけてるのは間違いないと思うんだけどね」

克史の指が離れていった胸に、智弘は手のひらを当てた。痛かった、痛みは尾を引いてまだここにある。呆然と立ちすくみながら、頭の中をめぐっていた言葉は「こんなはずじゃなかった」。

「行けよ」

克史が突き放すように言った。

「謝って来い。時間が経つほど後悔は取り返しがつかなくなるぞ」
叱りつける声にうながされて、智弘は走り出した。

朝美は郁を保健室に連れて行こうとした。階段の隣の職員棟に続く渡り廊下を、郁の歩調に合わせてゆっくり進む。泣きじゃくるだけだった郁からこんな言葉が漏れた。

「先輩があんな人だなんて思わなかった」

朝美は立ち止まった。肩を押していた手が離れて、郁は首をかしげて朝美を見た。朝美は表情のない顔で郁をみつめていた。

「あんな人って、あんなそう言えるほど先輩のこと知ってたの？」
攻撃的な物言いに郁は怯んだ。

「遠くから見てるだけで、噂話だけを頼りにして、いざ直接話してみたら思ってたのと違う人で。あんなに勝手に思ってた人柄と違ってたからってあんな人だと思わなかったって言われちゃ、先輩もいい迷惑だわ」

朝美のきつい口調に傷ついたけれど、この程度いつものことだ。ここで泣き入っていたら友達ではいられない。郁は言い返した。

「じゃあどう言えばいいのよう」

「先輩は最初からああいう人だったんだって思えばいいの」

「それじゃおんなじことじゃない」

結果的にひどい人であることに変わりがない。けれど朝美はらむように注ぐ視線を外さなかった。

「違うわよ。そういうところがある人だと知ることと、思ってたとおりの人じゃなかったと思うことは全然違う。知っていいこうと努力することと、勝手に人物像をえがいていくのと一緒くらいに違うよ。思い出しなよ。郁はさ、どうしてあたしと友達になったの？」

話題を変えられて郁はとまどった。

「きつつい顔して身長高めなせいで威圧感があって、おまけに口が悪くてさ。そんなあたしとどうして友達になろうとしたのよ」

「え……それは――」

自分勝手に高飛車だと嫌われている子だったけど、授業や掃除当番など何でも真面目にこなしている様子を見て悪い子じゃないと思つて近付いたのだった。前にも訊かれて答えた話だ。なのにどうして聞くんだらう？

「勝手なことをしてるわけでも人のこと見下してるわけでもないことを、あんただけはわかつてくれたよね。あたしは言葉選ぶのが下手で、思つてることを口に出さなきゃ気がすまない性格してて、それを直す気もなかったから嫌われても仕方ないって思つてた。けどあんたは『言葉はきついけど、誰かを傷つけようって考えてるんじゃないことがわかったから』って言つてくれた。あたしはそれがすごくうれしかったんだよ。見た目や噂じゃなくてあたしの中身を見てくれて。……あんたは今、先輩のことをうつらだけ見て中身を見てない。あたしがされて嫌だと思つたことをしてるんだよ？」

「朝美と先輩は違うよ。先輩がひどいことしたのは本当にあつたことじゃない」

朝美はきまずそうに瞳をゆらして後ろ頭をかいだ。

「それだけどさ、もしかして先輩聞いてたんじゃないのかな？」

「何を？」

「クラブハウスの横であたしたちが話してたこと。うつかりしてたけど、あたしたちつてあのとときサッカー部の部屋に張り付いてしゃべつてたんだよね。あんな薄い板くらいじゃ、きつと中まで丸聞こえだったよ。あんた殺されちゃうとか、お近付きになりたくないってさんざん言つてたよね」

聞かれてたかもしれないと言われてどきつとした。先輩の悪口を言つていたわけじゃないけど、聞いていたとしたらどう思うだらう。自分のせいじゃないのに何で嫌われなくちゃならないんだと思つたんじゃないだらうか。自分の失言に気付いて、郁は羞恥にかあつと顔をほてらせた。

どうしよう。

「聞いてたようだったら謝るんだね。盗み聞きした先輩も悪いと思

うけど、聞こえちゃうかもしれない場所であんなこと言っちゃったあんたも悪いんだから。まあ、あたしが言わせちゃった感じもあったから、悪かったって思うけどさ」

朝美は首をすくめてごめんと謝った。郁はいきおいよく首を横に振る。声は出なかったけれど、朝美は悪くないと言いたい思いは伝わった。朝美はほっとした笑顔を見せて郁の両肩に手を置いた。

「あたしはね、郁の目を信じてるよ。あたしのことを悪い子じゃないってわかってくれた郁の、人を見る目をさ。あんたが好きになった先輩だもの、きつといい人だよ」

好きと言われて顔をかぁっと赤らめた。好きは好きでも恋愛感情とは違う。憧れの範疇でしかない。口をぱくぱくさせて何とか否定しようとした郁に、朝美はわかってるよと言いたげににっと笑った。

昼休みの遠くのざわめきの上に、カン、と金属の鳴る音が響いた。先輩が校舎のドア枠を踏んだ音だった。音で振り向き姿をみとめて、郁はぽかんと口を開ける。

先輩は郁に目を向けたまま大きく息をついだ。

朝美は先輩が来るのをわかっていたかのように、少しも驚く様子なく郁から手を離してゆっくり近付いた。あと数歩のところまで一旦立ち止まる。どう声をかけようかとためらっている先輩に、朝美は前置きせず無遠慮に聞いた。

「一昨日のあたしたちの話、部室の中まで聞こえてました？」

「あ……ああ。うん」

とまどいながら先輩が答えると、朝美は肩越しに郁を振り返った。「だってさ。あとは一人で大丈夫よね？」

郁は感謝の笑みを浮かべてうなずいた。先輩の脇を抜けて朝美は校舎に入っていく。先輩は朝美を少し振り返りながら郁の前まで来た。一人で向き合つと、郁は緊張に強張った。すくんでしまつて顔が上げられなくなる。

「その……さつきはごめん」

遠慮がちな声が降ってきた。ちらりと見あげた先輩はすごく反省したふうにしょんぼりしている。

朝美の言つたように先輩はいい人だ。悪いことをすればちゃんと謝ってくれる、子供みたいに素直な人。記事から受けた印象そのままに。

でも郁は思う。

謝らなくてはならないのは自分の方だ。聞こえてないと考えて、先輩が悪いと言ってる訳じゃないから、それでいい気になって好き放題言つた。誰だって理由が何であれ、近付きたくないと言われれば傷つくのに。

郁はいきおいよく頭を下げた。

「わたしの方こそごめんなさい！」

おしまい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2854s/>

雨上がり、傘を返しに。

2011年4月7日01時40分発行